

宮内庁本

「金森茶道故実」の研究（中）

金森貴美

本稿は「金森茶道故実」翻刻（美学・美術史学科報11号）の訂正および注釈のみとして、他文献、資料との比較、引用等は「金森茶道故実」に関する私的な見解とともに、次回（下）に掲載する。
尚、本文中の漢字について、ほとんど当用漢字に統一したが、「灯籠」「燈籠」などのように二種類の漢字が使われている場合、当時、どのような使い分けをしていたのか解りがねて、原文のままとした。

宮内庁本「金森茶道故実」の研究（上）訂正

頁	段	行	誤↓	正
三	上	三	茶人です↓	
元	下	元	茶人について勉強して います	
二	下	二	片より↓	偏り
三	下	三	には造詣が深いが、↓	
六	上	六	については知られている	
七	上	七	遣し↓	遣し
六	上	六	金森流↓	宗和流
二	下	二	許して↓	恕して
一	下	一	助力↓	御尽力
三	上	三	のせていただく↓	
七	上	七	のせさせていただきます	
元	上	元	通世者↓	通世者
立	上	立	立下、↓	立下
頁	段	行	誤↓	正
三	上	三	上手技持人	上手扶持人
三	上	三	置↓	置敷
五	下	五	京塚↓	京塚
八	下	八	心↓	心得
三	下	三	落字↓	落字敷
二	下	二	落字ノ間↓	落字ノ間
二	上	二	見計↓	見計
七	上	七	竹、障子↓	竹障子
二	上	二	反古ミナト紙↓	反古ミナト紙
九	上	九	タテ付、竹↓	タテ付竹
六	上	六	置↓	置敷
五	上	五	針棚↓	鉤棚
五	下	五	ハ、サミ↓	ハサミ
頁	段	行	誤↓	正
二	下	二	所ハ、小ツギ↓	所ハ小ツギ
七	下	七	真名書↓	真名書
二	下	二	上端道り↓	上端通り
七	下	七	茶立口通口張付筥別↓	茶立口通口張付筥別
五	上	五	張ガミ↓	張ガミ
九	上	九	窓スタレ↓	窓スタレ
九	上	九	云、アミノソ↓	云、アミノハ
三	上	三	カキ作↓	カキ候
三	上	三	心得テ↓	心得ニテ
三	下	三	七之助、カコイ↓	七之助カコイ
四	上	四	小見出	小見出
四	下	四	ゴトグ↓	ゴトグ
上	上	上	ラレン、古↓	ラレン古

頁	段	行	誤	正
三	上	三	有、増↓	有増
一五	上	三項目 小見出	不心得次第↓不心得ノ次第	露地ノ仕様 露次ノ仕様
二	下	二	モノ也。↓	モノ也、 去共
二	下	二	去共↓	去共
四	下	四	心持、俄↓	心持俄
五	下	五	仕立物也↓	仕立ル物也
六	下	六	格合↓	格合
六	下	六	以下、是に習う	尤也
六	下	六	尤也↓	尤也
三	下	三	内外ニツ↓	内外二ツ
三	下	三	彫様↓	彫様
二六	下	二六	帯掛之釘↓	帯掛之釘
二六	下	二六	無之見計↓	無之、見計
一	上	一	ナレトモ、↓	ナレトモ聞
二	上	二	外露地↓	外露地ニ
四	上	四	中テ↓	中ニテ
四	上	四	露地↓	露地ニ
五	上	五	可被付処↓	可被付処ニ、
五	上	五	見事 候↓	見事ニ候
七	上	七	然所、↓	然所ニ、
八	上	八	留リ↓	留リニ
三	上	三	ケ様 斗ハ不心得↓	ケ様ニ斗ハ不心得
一四	上	一四	ケ様ニ斗ハ不心得ノ歟	ノ歟
三	上	三	無之様↓	無之様ニ
七	上	七	石段↓	石段ニ
九	上	九	スヘ様、第一↓	スヘ様第一、
二	上	二	ハエタル様↓	ハエ出タル様ニ
三	上	三	ヨハキ テ↓	ヨハキニテ
三	上	三	トリ候か、↓	トリ候歟、
三	上	三	以下、是に習う	カ子石石
三	上	三	カ子石、石↓	カ子石石
五	下	五	様 スエ↓	様ニスエ
六	下	六	様 テモ↓	様ニテモ
六	下	六	ヒキク↓	石ヒキク
八	下	八	並↓	並ニ
八	下	八	同様↓	同様ニ
九	上	九	無用也↓	不用也
六	上	六	露地↓	露地ニ
六	上	六	タスケトモ云、侘人↓	タスケトモ云侘人
六	上	六	侘人 公方↓	侘人 公方
六	上	六	ル ヨリ↓	ルニヨリ
六	上	六	明ク↓	明リ
三	上	三	十文字↓	十文字ニ
三	上	三	直置ト、横↓	直ニ置ト横ニ
三	下	三	置ト、可見合↓	置ト可見合
三	下	三	石灯笼↓	石燈籠
二	下	二	待合↓	待合ニ
二	下	二	棚 置ケハ↓	棚ヲ置ケハ
三	下	三	能ヤウ↓	能ヤウニ
三	下	三	利休、カコイ↓	利休カコイ
六	下	六	アワシ↓	アクミ
三	下	三	囲炉裏 テ ↓	囲炉裏ニテ
六	下	六	壁ノ方 ↓	壁ノ方
六	下	六	延タル↓	延タル
九	下	九	格合一↓	格合ニ
八	下	八	ヨウ足↓	ヨウ足
八	下	八	ソキヲキタル↓	ソキヲキタル
八	上	八	付ル也。↓	付ル也、
九	上	九	ユル也。↓	ユル也、
六	上	六	右ニ↓	左右ニ
九	上	九	寄麗↓	寄麗ニ
六	上	六	八程、近ク↓	程近ク
六	上	六	中ノ灰↓	中前ノ灰
三	上	三	又↓	又ハ
三	上	三	初釜杯ニテ灰崩シ可申↓	初釜杯ニテ灰崩シ可申
一	下	一	初会杯ニテ灰崩レ可申少キ↓	初会杯ニテ灰崩レ可申少キ
一	下	一	以下、是に習う	以下、是に習う

六	立肉ツルル、ツク↓ 立、肉ツルルツク
七	丸ツボ。↓ 丸ツボ、
八	コトウ↓ ユトウ
九	此分ノ↓ 此外ノ
一〇	袋ヲ用者↓ 袋ヲ用ル者
一一	金欄ノ袋、↓ 金欄ノ袋
一二	存之也↓ 在之也
一三	明州↓ 明州
一四	祖悟↓ 祖語
一五	弟子↓ 弟子
一六	溪、↓ 溪敷
一七	ニ付テ↓ ニ依テ
一八	墨秉流↓ 墨斎流
一九	以下、是に習う
二〇	身ヲ不飾、↓ 身ヲ不飾、
二一	数寄屋懸ル↓ 数寄屋へ懸ル
二二	候、間、ハヤ↓ 候間ハヤ
二三	似ヲ↓ 似せ
二四	天井、のあとに
二五	七尺五寸ニ直シテ一山之一行物ヲ懸被 申ニ付、床ノ天井
二六	呉松カ由御↓ 呉松カ沙汰
二七	大キナル懸物↓ 大キ成懸物
二八	時トキ↓ 此トキ
二九	座シ↓ 座シ
三〇	可然か↓ 可然カ

五	数寄屋者、所↓ 数寄屋者所
六	上下箱中ハ、↓ 上下箱、中ハ
七	可有之哉↓ 可有之敷
八	可然哉↓ 可然敷
九	九行と一〇行のあいだに ウニスル也
一〇	上下風袋↓ 上下中風袋
一一	上下↓ 上下箱
一二	有之、少心持有之哉↓ 有之故、少心持有之敷
一三	表具、用ヒ↓ 表具ニ用ヒ
一四	置様、長キ↓ 置、横長キ
一五	迎出ル↓ 迎ニ出ル
一六	ノ時ハ↓ ノ時分ハ
一七	高杯ノ↓ 雪杯ノ
一八	炭取出↓ 炭取持出
一九	申候哉。↓ 申候。或
二〇	釜ノ鎖懸テ↓ 釜ノ鎖懸ケ
二一	取、懸↓ 取懸、
二二	上モ↓ 上ニモ
二三	上、客ヘ↓ 上客ヘ
二四	累↓ 參
二五	以下、是に習う
二六	退、付↓ 追付
二七	別出ニ↓ 別書ニ

二	三ツ↓ 三ツ五ツモ
三	露地ナラバ、↓ 露地ナラバ
四	近過↓ 延過
五	ミル内↓ ミル内ニ
六	客返シ申ヲ、↓ 客返シ申ヲ
七	障子明ケ↓ 障子ヲ明ケ
八	先ニ取申候↓ 先キニ取申候
九	客出、ハテ中クグリ↓ 客イデハテ、中クグリ
一〇	時分、罷出↓ 時分罷出
一一	座ノ次第極能時分、↓ 座ノ次第極、能時分
一二	次第出、↓ 次第ニ出、
一三	朝ハ善↓ 朝ハ若
一四	束枝↓ 束枝
一五	戸ヲ、サラ↓ 戸ヲサラ
一六	客ノタニメ↓ 客ノタメニ
一七	不苦イニ↓ 不苦、イニ
一八	口程明、↓ 口可明、
一九	留日↓ 当日
二〇	寅ノ剋過↓ 寅ノ剋過
二一	入、扱ヨリ降り、↓ 入物ヨリ降り
二二	無様↓ 無之様ニ
二三	見事↓ 見ル事
二四	聞申↓ 聞ヘ申
二五	後炭置仕廻↓ 炭置仕廻

頁	段	行	誤	正
六	下	三	又、カスマジキ	又、カスマジキ
六	下	四	功者ナラハズ	功者ナラズハ
六	下	七	上座ニ	上座へ
六	上	四	見済ス	見済シ
六	上	三	ロクニ候得	ロクニ居候得
六	上	五	心ス	必ス
六	上	三	越シ、居テモ	越シ居テモ
六	下	六	可各別也	可分別也
六	下	六	釜ノフタ取	釜ノフタ取
九	上	一	一	一
九	下	八	次ノ者ノ	次ノ者
九	下	七	火鉢	火箸
九	下	七	直シ	能直シ
九	上	一	ナルヘキ	タルヘキ
一〇	上	二	婦候時より	婦候時分
一〇	上	三	互一礼	互一礼
一〇	上	三	不英	不苦
一〇	下	六	並達ノ外	並進ノ外
一〇	上	一	者、取能	者取能
一〇	上	一	柚味噌	柚味噌
一〇	下	二	可心得也	可心得事也
一〇	下	二	外有之	外ニ有之
一〇	下	二	不載	不載
一〇	下	二	有之也	有之敷
一〇	下	二	ノ方置時	ノ方ニ置時
一〇	下	二	宜式代仕上座	宜式代仕、上座
一〇	下	三	テモ、	ニテモ、
一〇	下	三	居ナガラニ	居ナガラ
一〇	下	四	取テ入事也	取テ入ル事也
一〇	上	一	出サバ	出サハ
一〇	上	二	合ノ縁	合ノ縁
一〇	下	八	左ノ手	右ノ手
一〇	下	四	左ノエノ	左ノエン
一〇	下	六	一下座	下座
一〇	上	九	通ヒ口ノ手	通ヒ口ノ手
一〇	上	九	ヤウニコ	ヤウニコ
一〇	上	〇	上座、茶ノ	上座。茶ノ
一〇	上	〇	不替カ	不替カ
一〇	上	〇	帯ニ工夫	常ニ工夫
一〇	上	三	置出ス	置合出ス
一〇	下	二	有テ	有之
一〇	下	四	ガウ柄杓	ガウ柄杓ト
一〇	下	六	極有紙	極リ有紙
一〇	下	六	習ラハ、ナレタ	習ラハナレタ
一〇	下	〇	立事	置事
一〇	下	〇	右之ノ方	右ノ方
一〇	下	三	物色也	物也
一〇	上	三	出雲殿	出雲殿へ
一〇	上	五	カンジ	カンジ
一〇	上	七	品、六ヶ敷	品六ヶ敷
一〇	上	七	ヨウニ	ヤウニ
一〇	上	〇	少懸	少懸
一〇	上	四	石燃籠	石燈籠
一〇	下	二	右テ	右ニテ
一〇	下	三	スグ	ススギ
一〇	下	四	其座敷ニ	其座列ニ
一〇	下	六	左ニモ	左リニモ
一〇	下	六	置出ル也	置出ル也
一〇	下	六	有之心得	有之心得
一〇	下	二	上	上ニ
一〇	下	二	後ニ、乞バ	後ニ乞バ
一〇	下	三	不切モ	不切ニモ
一〇	下	三	盆ノセバ	盆ニノセバ
一〇	下	五	盆ナシニテモ	盆ナシニモ
一〇	下	五	上、一文字	上一文字
一〇	下	四	当レハ	留レハ
一〇	下	四	当レハ	留レハ
一〇	下	一	段々	頭へ
一〇	下	二	糞ニテ	糞テテ
一〇	下	二	鮭	鮭敷
一〇	下	三	残候者	残リ候者

頁	段	行	誤↓	正	頁	段	行	誤↓	正	頁	段	行	誤↓	正
二二	下	三	無 _レ 掛様に↓	無 _レ 掛様に	二九	上	七	ふちかけ第一。↓	ふちかけ、第一	三三	下	二	可出。次↓	可出ず
二二	下	三	懸候へ↓	懸候へハ	二九	上	九	可持也。↓	可持出也。	三三	下	二	右手に持↓	右手ニ持
二二	上	三	ぬけたる也。↓	ぬける也。	二九	上	六	略候↓	略之	三三	下	二	但、是↓	但、是
二二	上	三	段々出申物↓	段々出申扱	二九	下	一	柄杓を↓	柄杓の柄を	三三	下	九	柄の客の右↓	柄の右
二二	上	三	上客ノ↓	上戸ノ	二九	下	二	例の手↓	例のかね	三三	下	九	水指の端へ↓	水指の場へ
二二	下	一	無手掛様↓	無手掛様	二九	下	九	居懸りと云、↓	居懸りと云	三三	上	一	可達とて↓	可進とて
二二	下	一	いたし、↓	いたし	二九	下	七	こきのばし↓	こきのはし	三三	上	九	底取、長火箸↓	底取長火箸
二二	下	一	亭主へ↓	亭へ	二九	上	八	堅からざる様に↓	堅からざる様に	三三	上	三	詰居ゆ↓	詰居申
二二	上	一	又有之通。↓	又右之通	二九	上	三	計にて↓	計申て	三三	上	三	それより↓	又それより
二二	上	一	被申を、聞て↓	被申を聞て	二九	上	三	炭、花、↓	炭	三三	上	三	入せず↓	入さまに
二二	上	一	引きいて↓	引にいて	二九	上	六	湯を汲、前に成共↓	湯を汲前に成共	三三	上	六	そこ↓	所也
二二	上	一	もうし↓	てうし	二九	上	五	さはきに↓	さはきに	三三	上	六	指合たらハ↓	指置たらハ
二二	上	三	可申か↓	可申や	二九	上	五	しつたり↓	しつはり	三三	上	六	うへまで↓	うへにて
二二	上	三	膳を↓	膳と	二九	下	五	音をする↓	音させる	三三	下	四	是も↓	是を
二二	上	四	はやく↓	手はやく	二九	下	二	ふく事、有之。↓	ふく事有	三三	上	三	柄杓↓	扱、杓
二二	上	四	扣かね↓	扣かね	二九	下	二	不可有↓	不可用	三三	上	三	左り↓	左り
二二	上	五	金をちかえ↓	金をちかへ	二九	下	九	右の↓	右之	三三	上	二	み指置↓	為指置
二二	下	四	是ハ↓	是にハ	二九	下	九	茶を扱て入↓	茶を扱て入	三三	上	九	居住↓	居住居
二二	下	五	一人↓	一人	二九	下	四	存之様↓	在之程	三三	上	二	如記ス。↓	如記ス、
二二	下	二	指図↓	相図	二九	上	三	なで廻し↓	なで廻し	三三	上	二	与されは↓	聞されは
二二	下	二	よき比↓	よき頃	二九	上	三	其の↓	其外	三三	上	二	大目の替り↓	大目の発り
二二	下	二	濟候ハ、↓	濟候ハハ、	二九	下	四	ひきつけん↓	ひき付ん	三三	下	六	いたさバ↓	いたせバ
二二	下	二	直に↓	直に	二九	下	四	被申に付↓	被申ニ付	三三	下	六	風炉の↓	風炉ノ
二二	下	二	尤、式正は↓	本式ハ	二九	下	七			三三	下	六		

二三	下	一	おわらして↓ おもくして
二三	上	三	おりはす↓ おもはす
二三	上	〇	湯茶↓ 茶湯
二三	下	六	ふるい↓ ふるひ
二三	下	四	附ク↓ 附リ
二三	下	二	羽よう足↓ ねよう足
二三	下	二	客 ねよう足
二三	上	〇	ませ、↓ よせ、
二三	上	九	をく↓ 近く
二三	上	九	論議↓ 詮議
二三	上	九	茶人は何時も水指の前真中に置、
二〇	下	三	通りに置、のあとに まをり↓ まをり
二〇	下	三	まをり↓ まをり
二〇	下	一	竹輪之段↓ 竹輪三段
二〇	上	三	妙喜庵↓ 妙喜庵団
二〇	上	〇	致↓ 被
二〇	上	〇	出入し、とうこ↓ 出入也、とうこ
二六	下	元	いたする也↓ いたす也
二六	下	三	柄を↓ 柄ヲ
二六	下	六	座敷も有之称也↓ 座敷ニも有之称也
二六	下	五	本口↓ 直口
二六	上	七	取揃↓ 所持

金森茶道故実・上 註解

- (1) 或いは宗五の書き違えか。不詳。
 (2) 山城国(今の京都) 涼安寺は『寺院総覧』にはない。同音で龍安寺が京都にあるが涼安寺と同一にあたるかは不明。
 (3) 小出吉英。天正一五―寛文六年(一五八七―一六六六)
 (4) 不詳
 (5) 不詳
 (6) 筆者の補筆。
 (7) 囲い。数寄屋、茶室のこと。
 (8) 真蕪、蔞、蕪。蔞張り天井、平天井、落天井に用いられる。
 (9) 台子飾りを正式とするの意。次回に詳述。
 (10) 本書秘巻に、数種の茶室平面図が掲載されている。
 (11) 曝れ木。
 (12) 古田織部。天文二二―元和元年(一五四四―一六一五)
 (13) 一山一寧(一二四七―一三一七)の一行の墨跡。
 (14) 本書中巻「数寄屋床之内」下巻「掛物ノ起リ之事」を参照の事。
 (15) 名物掛物か。
 (16) 洞。
 (17) 割て：分割すること。
 (18) 楯形。花頭口。
 (19) 中柱につく袖壁の下を吹き放ちにする時、横にわたす木。
 (20) 色紙を散らしたような張付に似た意匠の上下二段一組の窓。ともにことばの注意書である。このような細かい注意が多い。
 (21) 掻き落とし。
 (22) 窓の仕様の一種。突き上げ窓。
 (23) 反古。湊紙。宗和好がうかがえる場所。次回詳述。
 (24) 本書・秘巻図(5)に「鷺絵源三郎所持利休好」とある。
 (25) 正式な床の間「本床」は畳床。「真」にあたる。板床は「草」。
 (26) 軽々と仕立す。

- (27) 上巻末に自在の項あり。原本は現装四冊より多かったかもしれない。
 (28) 「加州ヨリ上リシ宗和ノ一三冊」という記事が「槐記」享保十五年(一七三〇)四月十五日条にある。次回に詳述。
 (29) 釣棚のまちがいであろうか。
 (30) 端喰。板の木口に取付ける狭い木。
 (31) むざと欠けりたる。うかとおろそかな。
 (32) 狭敷居。
 (33) 榎を欠く様なる事。
 (34) 真名(漢字)のこと。
 (35) 宗和の美意識。次回に詳述。
 (36) ノ銀という異色の茶人の名より転じて、変わり種の茶湯のこと。
 (37) 障子を引く時に指をひっかける場所。
 (38) 茶室における隠陽の表現、場面転回等に使用。
 (39) 同じことを繰り返さない心得。随所に出てくる重要な教えのひとつ。
 (40) 床柱の上につけまわしたものの。
 (41) 現在、柄杓は床にかけない。棚には現在もある。
 (42) 金森方氏。慶長一五―寛文四年(一六〇九―一六六四)宗和の長男。
 (43) 秘巻に天満門跡、天麻門跡とある。
 (44) 教如上人光寿。永祿元―慶長一〇年(一五八八―一六一四)
 (45) 前田光高。元和元―正保二年(一六一五―一六四五)四代目加賀城主。
 (46) 小堀遠州。天正七―正保四年(一五七一―一六四七)
 (47) 「露地末ヨリ景気ホノカニ見へ候」をそのまま歌に表わしている。
 (48) 閑静有之様ニ、
 (49) 本書に頻出。恰合、恰合と記されているが、恰好のこと。
 (50) 佗茶の主張の一つ。
 (51) 露地と雪隠内、両方について説いている。
 (52) 古田織部の創意。

(51) 秀吉鑑の逸話から由来。他の樹木に対し対照の破を意味するもの。
(52) 暮松左京兆記通成のことか。生歿年不詳、能楽金春系の半玄人。
享保二年乙丑林鐘吉日(一五二九)に「風姿花伝」を書写した記録がある。

(53) 陸。正。

(54) 石の片側をふんで石をひっくり返しそう。

(55) 「三つ」というのはどの流派も嫌う。

(56) 低く、むらのあるように。単一でなく、変化をつけて。

(57) 現在は石の移動、取り替えまでは行なわれない。

(58) 席入の際に手水をつかう鉢。手水鉢。これで身心共に浄める。

(59) 宗和は公家とのつながりが深かった。

(60) たてに。垂直に。

(61) 鬮。待合で席入の順を決める時用いた。

(62)(67)(68) それぞれ、四畳半、合目畳、逆勝手時の置合わせについて。露地の説明が終わり、座敷内に目を移している。

(63) 茶頭(茶坊主)の定位置。茶を点てる畳。

(64) 点前中の用語で、二つものを別々の所におくことらしい。この場合、定められた範囲外に出ず、といった方が近い。

(65) 筆者の補筆

(66) 台子から発生した大櫛。

(69) 京都山崎妙喜庵。伝・利休作。現存は二畳隅炬。ここでは一畳半とある。

本書秘巻(図12)にも一畳半とあり。次回に詳述。

(70) 豊臣秀吉のこと。天文五―慶長三(一五三六―一五九八)

(71) 前田利常。文祿二十万治元年(一五九三―一六五八)加賀城主。

(72) 一酸化炭素中毒防止と景観の為。本書上巻「数寄屋之仕様ノ事」障子明懸ル様」の項にも参照。

(73) 筆者が重要と思われるところに○を付したのであろうか。

(74) 風炬の敷板。

(75) 根来物。

(76)(77) 風呂の足の典型二種。ヨウ足は、ニユウ足(乳足)ではないか。

(78) 灰のつくり方で年功があらわれるといわれる。

(79) 釜かけ。

(80) 灰の仕様の一種。後方に、杉の木のようにとがった山形をつくる。

(81) ししおき。肉つき。

(82) 土器。

(83) 鎖の間。自在のあるところからこの名がある。

(84) (69)参照。

(85) 炭斗。

(86) 炭の白くなったもの。

(87) 燥ぎたる灰。乾いている灰。

(88) 灰走る故。はねる、とびちる。

(89) 飄。

(90) 置合の項参照。

(91) はすかいに。ななめに。

(92) 飜。建水。

(93) 蓋置。

(94) 溝。景。

(95) 茶の機転、茶の本質。

(96) 現在、宗和流に切柄杓(柄杓の置き方的一种)は残っていない。

(97) 手前的一种。

(98) 面桶。曲建水。麵桶。

(99) やつてはいけない。

(100) 木目のこと。

(101) 扱き延ばし。

(102) 引解。

(103) 臍。へそ。

(104) 掻い込み。

(105) 銅。

(106) 当時、茶人は全て男性である。現在、女性の場合は素手ではとらな

- い。
- (107) 後部に同様の記述があり、「リンリン」とある。凍々とか。
- (108) 蓋についた蒸気の霽で蓋が蓋置にくっつく時がある。
- (109) (110) 釜の口の形からつけられた名。
- (111) がったりと思いきって。疑態語。
- (112) 捨てなくてよい量だけ見積って汲む。
- (113) 裏千家では茶入だけをまわす。宗和流は「唐物点」のとき「押し廻し押し廻し」である。
- (114) 茶杓と茶入を片方ずつ引くこと。
- (115) 慎重な取扱い。又、大事なものであるから「陽」の右手を添える。
- (116) 手前の動作と動作に間をあけて。
- (117) 擦るよう。
- (118) 茶碗の置合わせ直し、今も生きている。
- (119) 一気に、疑態語。
- (120) 手を一八〇度ひっくり返すことか。
- (121) 十四屋宗悟。天正一六年（一五八八）珠光門下。
- (122) 服。紗湿の時か。或は茶巾を畳む意味である。フクタメか。
- (123) (124) 「宗和の茶巾調べ」といわれる、手前の手順の中の特殊な動作、茶巾が汚れたりいたんだりしてないかどうか調べる。
- (125) 式正に茶巾を畳み置時。
- (126) 裏千家は左から右にふく。ふくという動作は心を清め静める儀式。
- (127) 脱字があると思われる。茶巾が茶碗のふちにさわらないようにしなければならぬ、ということか。
- (128) 疑態語。たれ下がった様。
- (129) 動作の形。
- (130) 員茶式のこと。
- (131) (132) 高麗は朝鮮産の茶碗。瀬戸は和物。
- (133) 客本位の自由さ。現在はなくなりつつある。
- (134) (135) (136) (138) 金を釣る道具。図④参照。
- (137) 自在の細工屋。

- (139) 籠網か。
- (140) 抜き走らせ。金沢弁である。このように金沢弁が随所に現われる。
- (141) 窄やかに。
- (142) 玉やメノウ等を石の帯という。
- 金森茶道故実・中 註解
- (1) 掛物の名称の一つ。図②参照。
- (2) 画讃等の意味。画に書き添えられる詩句のこと。
- (3) 人物画、肖像画。
- (4) 少し透けて。
- (5) 下巻に詳細あり。上巻にも少し記述がある。
- (6) 中国、日本の禅林の筆跡の総称。
- (7) 風袋。掛物表具の名称。図②参照。
- (8) 障い。
- (9) 功者のこと。
- (10) (11) (12) 床の飾り方。
- (13) 畳床に花入を置く時に敷く薄い板。(17) (18) 参照。
- (14) 畳目。
- (15) 曾呂利花生。中国製古銅花生。
- (16) いじいじ塗。漆器の技法。
- (17) 薄板の一種。蛤端のこと。
- (18) 薄板の一種。武器の矢筈に似て一条の切り込みが巡る。
- (19) 通常使っているものことか。
- (20) 宗和は作意がうかがわれる。
- (21) (22) (13) 参照。
- (23) 口の大きい花生。
- (24) 水際を透かし。
- (25) 環。
- (26) 禁花。
- (27) 錠。

- (28) 花生の種類。
 (29) 和船覆い。
 (30) 季節感の出現。上巳は上巳のこと
 (31) 七事式の一つ。
 (32) 虫くい。もか。
 (33) 生歿年不詳。利休七哲のひとつ。天正九年（一五八二）二月一九日
 文獻初出。
 (34) 奇数。奇数は「隱陽」の「陽」。隱陽は茶の世界で重要な位置を占
 めている。
 (35) 茶の機軸。利休の朝顔の逸話と逆。
 (36) 口切の茶事。壺壯。
 (37) 歪みたる。
 (38) 曲張か。
 (39) 柿合塗、椀合塗。
 (40) 文箱の掛子、懸籠。
 (41) ここから各種棚についての説明。
 (42) 茶席と勝手を往復するところからついた名。茶を二種入れて出す。
 (43) 人形の香合は、人間のように扱う。
 (44) 結文のまちがいか。
 (45) 蓋置と柄杓、羽帚と香合は切っても切り離せない。常にペアで使う
 ものである。従って、香合は鳥の本体、羽帚は鳥の羽に見立ててい
 るのである。
 (46) 文比べ。
 (47) 唐物棚。
 (48) 香箸。
 (49) 茶入の一種。下巻、茶入蓋の項で詳述。金森可重は金森大海を所持
 した。
 (50) 筥司。
 (51) ここから忌事集に入っている。突然見出しもつけずに「タジノ事」
 につながっているところに、原本との写し違いの可能性をうかがえ

- る。
 (52) 足袋は、寒さを防ぐためのもの（皮から儀式（布）へと変化した。
 (53) 変える事。
 (54) (55) (56) 現在にも共通している。
 (57) 「けん」（具・交）を食べるのははいしい。
 (58) 現在、喰い残しは全て持ち帰るが、当時は全て置き帰ったようだ。
 当時は客中心に茶事が進んだ。
 (59) 舐りかわらぐる。
 (60) 貴人には無言で接する。恐れ多くて話せない。
 (61) 禅院の作法である、現在は応用されている。
 (62) 加雑、加雑鑰。鑰の一種。
 (63) 銅羅、喚鐘。
 (64) 守り見つめて、か。
 (65) 全てが亭主の作為であるから、むやみやたらにいじってはいけな
 い。
 (66) 茶を点てる邪魔になる。
 (67) たたないでその座のまま眺める。
 (68) (69) (70) (71) (72) 当時の禁止事項であるが、現在は普通のことと
 ある。
 (73) 大服。大量に茶を点てたことからついた、廻し飲み法。
 「大服ノ御茶湯」は、近衛家熙が祝儀茶として正月七日に開いたも
 の。
 (74) 下座の者は相伴者であるから、直接亭主に話してはいけない。どう
 しても話したい時は、正客に仲立ちをしてもらおう。
 (75) 覆輪の金がとれてしまう。
 (76) 茶碗の口縁を金銀で覆ってある。補強と毒殺防止、装飾のため。
 (77) 道幸創始といわれる押入棚の一つ。
 (78) 名香木の最上をいう。
 (79) 建水の中には使用済の汚れた水が入っているはずである。
 (80) (81) 一度にかねを合わせ、合わなくても、二度すらせるような見ば

- えの悪いことはしない。
 (82) 画一的に並べたりすること。
 (83) 湯返しのことか。
 (84) 筆者の補筆と思われる。
 (85) 置合の項参照。
 (86) 水がつくから。
 (87)(89) 掛物の名称のひとつ、図②参照。
 (88) 粗末なこと。
 (90) 懸物の項参照。
 (91) 盆と茶入は別々に返す。
 (92) ほしい時は所望してよい、と他所にある。
 (93) まっすぐに
 (94) 露地入の項参照。
 (95)(96) 灰の仕様。
 (97) 朝茶
 (98) 宗和流では、蓋置を建水に逆に入れて持出し、畳に置く時にひっくり返す。これは建水で湿っていた時、蓋置に水がついて畳を汚さないため。又、下巻にも記述あり。
 (99) 七事式の一つ。
 (100) (35)参照。床の花を死なせることになる。逆の利用法もある。
 (101) 自分と他人の道具の取扱を区別するのはよくない。本文に例がある。
 (102) 上から落とすような乱暴な置き方はいけない。
 (103) 上巻(107)参照。
 (104) 何時もシホレタル花はよくない。
 (105) ここまで忌事集、ほとんど全て他項目に出てくる。
 (106) また棚類に戻る。
 (107) 作配か。
 (108) 秘伝といえるだろう。
 (109) 棧蓋。蓋の裏に二本の棧がある。
 (110) 宗和流独特のもの。茶通箱の蓋の一部分が、加工されず、裸木の表

- 面が出ていること。シシガハコ。
 (111) 紙を張ること。
 (112) 雲母。
 (113) 取り合わせの妙。
 (114) 昔のお灸の位置。
 (115) 功者でなければ。
 (116)(117)(118) 茶器の一種。下巻茶入蓋の項参照。
 (119) 山名宗全。応永十一—文明五年(一四〇四—一四七三)所持していた瀬戸肩衝茶入は大名物・山名肩衝。
 (120) 小出伊勢守吉親、天正十八—寛文八年(一五九〇—一六六八)所持していた文茹茶入は大名物・唐物茶入。
 (121) 茶通箱使用の時は二種以上の茶が用意されているから。
 (122) 座をかえず、続けて点てる。
 (123) 景がちがえば、例えば、蒔絵と真塗り等。
 (124) 挽家。
 (125) 手前の間をみはからって。
 (126) 上等の白麻布。
 (127) 茶巾に使用した布の一種。
 (128)(129) 水指の一種。
 (130) 上巻(121)参照。
 (131) 輪成。
 (132) 疑態語。
 (133) 飾り手前。裏千家では「四ツ伝」にあり。
 (134) 類似表現が何度も出てくるが、単純であるが故の難しさを語っている。
 (135) 唐物の扱いは和物と別にする。一種の敬いである。
- 金森茶道故実・下 註解
 (1) 茶入の蓋は象牙製が主流である。
 (2) 穿。

- (3) 利休七哲のこと。
- (4) 蓋の一種。
- (5) 木。象牙の筋。
- (6) 蓋の部分。手でつまむところ。
- (7) 虫くい。有か。
- (8) 金森長近。大永四―慶長一三年(一五二四―一六〇六)宗和の祖父。
- (9) 米螺蓋。
- (10) から(11)までは、茶入の種類紹介。勢至、棗、肩衝、丸壺、茄子、文琳、驢蹄、瓢箪、樽、甌籬、常陸帶、鶴首、柿、柑子、水滴、瓶、飯胸、湯桶、大海、搦茶(搦座)。(山上宗二記)
- (12) 目利。
現在、棗は共蓋であるから、象牙の蓋はない。
- (13) 湯次。
- (14) 皆口(広口)は割蓋(縦二つ割の蓋)。
- (15) 新しい作の。
- (16) 仕覆。
- (17) 鍛子、間道、モール。
- (18) 上杉瓢箪。大名物、漢作唐物瓢箪茶入。
- (19) 上杉瓢箪に添えられている袋は、萌黄地一重蔓小牡丹金襴と青木間道。
- (20) 今渡りか。
- (21) 宗和の華麗好みを強調している。赤好みの伝承あり。次回に詳述。
- (22) 利休以前。
- (23) 利休以後の例外。
- (24) 藤原定家、応保二―仁治二年(一一六二―一二四一)筆の小倉色紙のこと。
- (25) 村田珠光。応永三〇―文龜二年(一四三三―一五〇二)
- (26) 安倍仲麻呂。(七〇〇項―七七〇)
- (27) 「天の原 ふりさけ見れば 春日なる 三笠の山に 出でし月かも」
(万葉集・巻二―一四七)

- (28) 藤原為家。建久九―建治元年(一一九八―一二七五)
- (29) 圓悟克勤の墨跡か。一般には、圓悟の懸け初めは珠光といわれる。茶会記では永祿二年(一一五九)に初出。
- (30) 祖師の言葉。
- (31) 南浦紹明、嘉禎元―延慶元(一一三三―一一三〇八)と宗峰妙超。弘安五―建武四年(一一八二―一二三三)共に臨濟宗の僧。
- (32) これより大徳寺僧の墨跡をかける慣いは現在に至っている。
- (33) 古嶽宗亘主流の派。
- (34) 大深宗牧。大徳寺四派のうちの南派。
- (35) 古嶽宗亘。寛正六一天文一七(一四六五―一五四八)一休の弟子。
- (36) 飯尾宗祇。応永二八―文龜二年(一四一一―一五〇二)
- (37) 尼崎黒木の文。宗祇が利休に宛てた書状。
- (38) 瀬田掃部のことか。?―文祿四年(一一五九五)利休七哲の一人。
- (39) 牡丹花肖柏。嘉吉三―大永七年(一四四三―一五二七)連歌師。
- (40) 永祿六一正保二年(一五六三―一六四五)利休七哲の一人。
- (41) 一休宗純。応永元―文明一三年(一三九四―一四八一)
- (42) 墨斎は没林(倫)紹等のこと。歿年不詳、一休の弟子。
- (43) 南江宗沆。嘉慶元―寛正四年(一三八七―一四六三)臨濟宗。本書の中心人物、次号に詳述。
- (44) 一休と南江。
- (45) 黒は粗末・下位をあらわす、最上位の色は紫。
- (46) 名物の限定を行なっている。
- (47) 尾張。
- (48) 「諸悪莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸仏教」の起句。現在、大徳寺塔頭、真珠庵にあるが、ここに出でくるものとは別物らしい。
- (49) 京都。
- (50) 上巻(52)参照。
- (51) 床に懸けるには長すぎるから。
- (52) 「名物かけもの所持の輩ハ床の心得あり、横物にて上下つまりたらば床の天井を下る。豎物にて余る程ならば天井を上げてよし。別のか

け物の時あしき事、少もいとふべからず。」(南方録)

- (53) 紀州。
- (54) 蘇芳、檳榔樹、当金、黒檀、桑^カノ木。
- (55) 溜塗。
- (56) (57) (58) (59) 袂褙、幢褙、輪褙。掛物表具の種類。図②参照。
- (60) 中金欄、金紗、印金、縫紗、唐縫、鍔子。
- (61) 由緒ある。
- (62) 弘治二十文祿四年(一五五六―九五) 利休七哲の一人。
- (63) 利休と氏郷兩者の判。
- (64) 「さびたるはよし、さはしたるハ悪し」(石州三百ヶ条)
- (65) 象牙。
- (66) 現在でいう、わらあみの座ぶとん。
- (67) 間のとり方の重要性を示している。
- (68) 茶巾のことか。
- (69) (70) (71) 懐石の様子。
- (72) それぞれの好み調べ。
- (73) 場面転換。
- (74) 内的表現。神聖さを表わす。
- (75) 混雑しないように。
- (76) 客の心得の一つ。前出。
- (77) (79) (81) (85) 当然の心得。
- (78) 栗形。
- (80) 挨拶。
- (82) 裏方、茶室と水屋を行き来する。
- (83) はめこみか。
- (84) 来か。座るあきがあるということであろうか。
- (86) 台座か。対座か。
- (87) 礼。
- (88) (89) 現在とちがっている。
- (90) 達人。

(91) (95) 見所。

- (92) 一直線に並べるのはよくない。茶入袋は小しずらせて見映えを考え
- (93) 茶は香が生命である。
- (94) 寸切一疊。
- (96) 引(敷)写しに。
- (97) 伊達。
- (98) 畳床は一畳丸畳であるから、広い。両足で上るのならば、現在でもかまわれない。ただし、宗和流でのこと。
- (99) 元のかねあい。
- (100) 縁高。
- (101) 当時の菓子はまだ甘い物が少なく、果物・木の実が多い。
- (102) 料理。
- (103) 次の料理。
- (104) さめないうちにたべるが身上。
- (105) (108) 懐石料理の一種。
- (106) 重。
- (107) 自分の前に並べてすすめられたもののほかはたべすぎないこと。おかわり等はあまりよくない。
- (109) 別の。
- (110) (111) 現在も生きている。
- (112) きな粉。
- (113) 柚のへた。
- (114) 料理の一種。
- (115) 時を問わず。
- (116) ととのえるべし。
- (117) 華道の心得に近い。
- (118) (90)参照。
- (119) そと見て。塗り方・銘等をみる。
- (120) 真の秘伝は口伝えにより、文字に残さない。

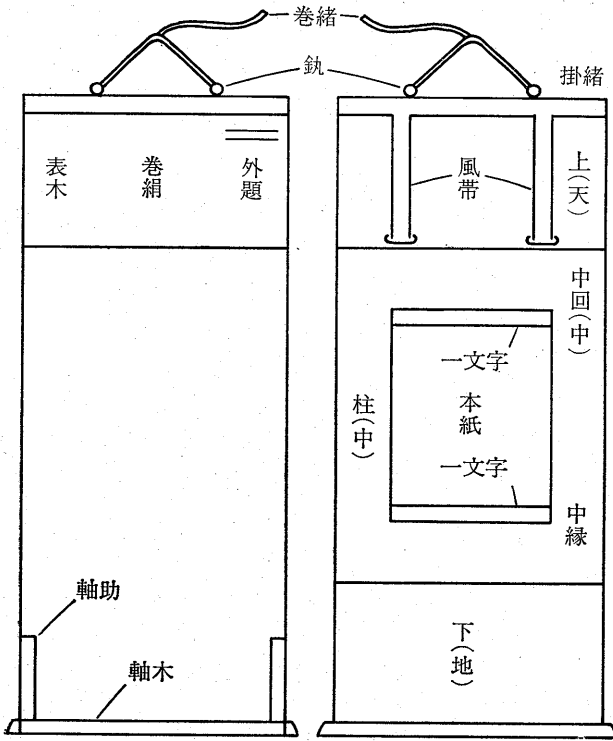
- (121) 天目茶碗を使った手前の一種。貴人に用いる。
 (122) 酸漿。台天目台の部分名称。
 (123) 中巻、忌事集の項にも出てくる。
 (124) 本書秘巻註(5)と逆。
 (125) ノ観についてくわしいのは(長闍堂記)。上巻(38)参照。
 (126) 秀吉の時代。
 (127) 仁清の絵入茶碗を思わせる。
 (128) 小座敷は少人数でこそ茶が生きる。利休の身上。
 (129) 卑下。
 (130) まっすぐ。
 (131) 形式ばかりにとられては。
 (132) 悟りのむずかしさ。
 (133) 重要でない。
 (134) 前田利長。永祿五―慶長一九年(二五六二―一六一四)
 (135) 木目肩衝茶入、大名物。
 (136) 金森可重。永祿元―元和元年(一五五八―一六一五) 宗和の父。
 「金森出雲尤目きゝの功者なり」(長闍堂記)
 (137) 優なる。
 (138) 茶入ニ不取とあるは、無限のまぢがいか。
 (139) 中途半端はよくない。
 (140) 難しき也。
 (141) 照のおわり。途中で炭がきえる事。
 (142) 気楽に。
 (143) 虫くい。火か。
 (144) (145) 現在はくり返さない。
 (146) 眠りつきたるようなるは。
 (147) 中巻、忌事集にあり。
 (148) この場合、五節句の一、三月三日。
 (149) 遠方より帰ってきた人を迎える茶席の時。
 (150) 本文、筆者注。

- (151) 替否両論あり。
 (152) 他のこと。
 (153) 釘ウタバ。
 (154) 僻事。
 (155) 一般人が普段使わぬ雪隠を御使用になる方がいらっしゃるから。
 (156) 折檻。
 (157) 茶室に入りて後の拝見の仕方。
 (158) 乾かし。
 (159) 一閑人。
 (160) 炭の表面か。
 (161) 金森七之助方氏の夜会。
 (162) 灯具の一種。
 (163) 武野紹鷗。文亀二―弘治元年(一五〇二―一五五)
 (164) 炭櫓。
 (165) 土壇。
 (166) かなり重要か。
- 金森茶道故実・秘 註解
 (1) 曹洞宗と並ぶ禪宗の一宗派。茶道と關係が深い。
 (2) (3) (5) 本書下巻註(12)と逆。
 (4) 千宗易(利休)。
 (6) つりあいの妙。
 (7) (9) (10) (11) (12) もちろん当時の時の表わし方。
 現在になおすと、明七時は午前四時、辰之刻は午前九時、九半時は
 午後一時、八時は午後二時、暮六時は午後六時。
 抜か。筆者の書き損いである。
 (8) 抜か。筆者の書き損いである。
 (13) (14) もちろん陰曆。
 (15) 二―三日
 (16) 自身あるべきなり、と読んでみたいが、どうか。
 (17) あまり

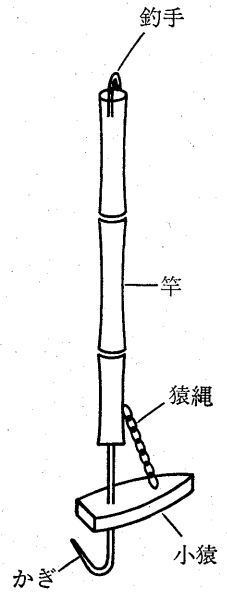
- (18) 露地中潜りの小戸の一形式。角戸。
 (19) ひとしお。
 (20) 字が左に極端に寄っているのだが、この場合「は」で妥当と思われる。
 (21) 透かし
 (22) あわび結。淡路結。結び方の一種。
 (23) 知らず。
 (24) 実際に茶入に添えられている袋。
 (25) したためおくべし。
 (26) 菓研。
 (27)(28) いろいろの仕様。
 (29) 灰吹。吹殻入れ。
 (30) 又は懐紙。
 (31) 本書上巻にタスケとして出てきた。
 (32) 櫃形。
 (33) 水屋道具の一種。
 (34) 筆者の書き損い。
 (35) 手前の間をあけて。
 (36) 完和の派手好みを示すような記述である。次回に詳述。
 (37)(39)(41) (8)と同様、抜か。
 (38) 金の蓋をとりかけ。
 (40) 燻着(焼香)とよんでみたいが、どうか。
 (42) 番茶の代用。
 (43) 達人。
 (44) 客の好みを調べるため。下巻にも出てきた。
 (45) 調子抜かざる様に。//間々の呼吸を生かして。
 (46) ひかえぎみに。
 (47) 千道安。天文一五―慶安一二(一五四六―一六〇七)利休先妻の子。宗和が師事したひとりといわれる。
 (48) 軽忽に。

- (49) 茶入袋の名称のひとつ。図③参照。
 (50) 茶巾を定法通りたむこと、転じて茶巾そのものことか。
 (51) 勢よく、か。
 (52)(53) 茶の心得。
 (54) 目の位置等、細かい所に神経を使っている。
 (55) 茶頭の枝。
 (56) 間がある。
 (57) 心の緊張の疑態語か。
 (58) 巢の方向を右に。(54)参照。
 (59) 客の位により挨拶の仕方が違つ。
 (60) 利休の幼名。
 (61) 支配地
 (62) 有り難き也。
 (63) 利休の正道が伝わっていないことを示している。
 (64) 茶の生産地。
 (65) 学び初めの人。
 (66) 主になるものをひとつつくる。
 (67) 野々村仁清。清右衛門。仁清焼の祖。

図② 懸物の名称



図① 自在



図③ 茶入袋

